〔研究ノート〕

高学歴独身男性の結婚意思に関する事例研究

The Case Study of Marriage Intention of Well-Educated Bachelors

加　藤　千恵子
Kato Chieko

要約

現在，日本において，初婚年齢は年々上昇傾向にあり晩婚化が進んでいる.これを学歴別に見ると，高学歴層の者において顕著であることがわかる．その中でも調査・研究が少ない男性に注目し，彼らの結婚意思とそれに影響を与える結婚観について，個人別態度構造分析を用い，事例を通して検討した．その結果，従来の調査・研究において支持されている男性が結婚難に陥っているという結果は，本研究の高学歴の独身男性についてはあてはまらないことが明らかになった．対象者は自らの意思により結婚するか否かを選択しており，自分の理想とするライフスタイルと結婚によるライフスタイルの変化，結婚相手との価値観の一致などを真剣に考え，結婚に対する葛藤を抱き，結婚を躊躇していた．さらに，長時間労働により家庭生活と仕事での自己実現を両立させ難いためライフスタイルを決めかね結婚意思が低下するという可能性と，結婚を前提としないようなライフスタイルを選択しても生活に困らないため結婚に消極的になる可能性も示唆された.

【キーワード】結婚意思，結婚観，高学歴，独身男性，個人別態度構造分析

問題と目的

現在，日本において，初婚年齢は，Table1に示した通り年々上昇傾向にあり，晩婚化が進んでいる（国立社会保障・人口問題研究所，2003b）.

Tablel　初婚年齢

年次	男性（歳）	女性（歳）
1965	27.42	24.82
1970	27.47	24.65
1975	27.65	24.48
1980	28.67	25.11
1985	29.57	25.84
1990	30.35	26.87
1995	30.68	27.69
2000	30.81	28.58

（国立社会保険・人口問題研究所，2003ｂ）

晩婚化現象は，学歴別に見ると，男女とも高学歴の者で進んでいる（阿藤，1989，1994）ことがわかる．高学歴の独身女性に関しては，経済的自立が可能になったなどの理由により，結婚を望まなくなったという調査・研究が多数ある（阿藤，1994; 大橋，1993など）が，高学歴の独身男性に注目した調査・研究は少なく，女性の側が結婚する必要がなくなり，その結果，男性が結婚難に陥っているという側面から捉えているものが多い（伊藤，1995; 伊東，1997b; 湯沢・川崎，1989など）．そこで，本研究では，高学歴の独身男性の結婚意思に注目し，それに影響を与える結婚観について検討していく．独身男性全般の結婚観としては，変化しているもの（“結婚適齢期志向”の弱体化，自由を失うことへの危惧など）と，変化していないもの（同棲に対する抵抗感，離婚に対する抵抗感など）があると考えられるが，それが高学歴の独身男性の結婚意思にどのように影響するかを本研究において検討していく．

変化した結婚観としては第一に，“結婚適齢期志向”の弱体化が挙げられる．国立社会保障・人口問題研究所（2003a）の調査によると，結婚意思がある18歳以上35歳未満の独身男性のうち，“ある程度の年齢までには結婚するつもり”という“結婚適齢期志向”と“理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない”という“理想の相手志向”を比較すると，1987年には“結婚適齢期志向”の者が60.4%であったが2002年には48.1%となり，逆に，“理想の相手志向”の者は1987年に37.5%であったが2002年には50.5%となり，“結婚適齢期志向”の者が10%以上減少し“理想の相手志向”の者が10%以上増加している．この結果から，“結婚適齢期志向”の希薄化が伺え，理想の相手が見つかるまで結婚しない者が増加してきていることがわかる．

第二に，性別役割分業意識の希薄化が挙げられる．国立社会保障・人口問題研究所(2003a)の調査によると，“結婚後は，夫は外で働き，妻は家庭を守るべきだ”に賛成の独身男性は，1992年には61.7%であったが2002年には40.3%に減少している．結婚意思のある者の方がない者よりもこの意見に賛成しているが，性別役割分業を肯定する者の方が減少傾向にあるため，そのことが晩婚化に影響を与えているものと推察される．

第三に，自由を失うことへの危惧が挙げられる．伊東(1997a)によると，男性において，個人主義的であればあるほど結婚することにより自由がなくなることを恐れ，その結果，結婚したいと思わなくなるという傾向が示唆されている．また，博報堂生活総合研究所(1993)の調査においても，25歳から39歳までの独身男性に“結婚とは自由を奪われるものである”と思っているかどうか尋ねたところ，それに賛成した者は54%であった．このように，自由を失うことを恐れて，結婚することを躊躇している様子が伺える．

第四に、結婚して快適な生活を得るという結婚に対する希望よりも、独身生活の方が快適であると感じてきていることが挙げられる．高度経済成長後の豊かな社会により親が子どもに十分な援助を行うことが可能になり，その恩恵を受けて豊かに育っている現代の若者は，結婚により経済的な水準が下がってしまうことを危惧し，結婚せず親と同居することにより経済的ゆとりを享受している（山田，1999，2000）．このように，結婚せず親と同居していた方が経済的なゆとりを維持することができるようになった．また，一人暮らしの独身の不便さが減少してきたことも挙げられる．家事や食事の外部化により独身生活が便利になり，一人暮らしをしていても生活の不便さを感じない社会となった（藤竹，1992）ことも挙げられる．これらのことが結婚の必要性を減少させたと考えられる．

上記のように結婚観の変化を示すものがある一方で，変化していない側面もある．第一に，同棲に対する抵抗感である．国立社会保障・人口問題研究所（2003a）の調査において，18歳以上

35歳未満の独身男性に“男女が一緒に暮らすなら結婚すべきである”に賛成か否かを尋ねたところ，1992年には78.5%，2002年には71.6%が賛成であり，減少しているものの，ほぼ7割が賛成しており支持している者が多いことがわかる．

第二に，離婚に対する抵抗感である．同調査において，“いったん結婚したら，性格の不一致くらいで別れるべきではない”に賛成か否かを尋ねたところ，1992年には67.7%，2002年には66.4%が賛成で，ほぼ変化がなかったといえる．このことから，気持ちよりも規範意識が優先している様子が伺われる．

第三に，結婚しても子どもを持たないことに対する抵抗感である．同調査において，“結婚したら，子どもは持つべきだ”に賛成か否か尋ねたところ，1992年には87.5%，2002年には76.2%が賛成しており，減少しているものの，圧倒的に支持している者が多いことがわかる．

第四に，独身でいることに対する抵抗感である．同調査において，“生涯を独身で過ごすというのは，望ましい生き方ではない”に賛成か否か尋ねたところ，1992年には65.3%，2002年には60.9%が賛成しており，結婚すべきであると思っている者が6割以上を占めていることがわかる．

以上のような変化していない結婚観を支持しているのは，結婚意思がない者よりも結婚意思がある者の方が多い（国立社会保障・人口問題研究所，2003a）．

上述した独身男性全般において指摘されている結婚意思とそれに影響を与える結婚観が，高学歴の独身男性においては，どの程度，どのように当てはまるのかを探索するためには，個人の主観的で多様な考え方の枠組みを，事例を通してとらえることが有効であると考えられる．そこで，本研究では，いわゆる結婚適齢期に当たる20代30代の高学歴の独身男性を対象者とし，個人別態度構造分析（Analysis of Personal Attitude Construct ：以下，PAC分析と呼ぶ）を用いて，事例研究を行った．PAC分析とは，個人の意識や態度を浮き彫りにするために，内藤(1997)により開発された技法であり，当該テーマに関する自由連想，連想項目間の類似度評定，類似度距離行列によるクラスター分析，当人によるクラスター構造の解釈を通じて，個人別に態度構造を分析するものである．この分析では，当該テーマに関する具体的エピソードを想起することで，考え方，イメージ，そして態度を個人の内面深く知ることが可能となる．さらに，想起されたエピソード間の類似度を直感的イメージで評定させ，クラスター分析を行うことで，当人が意識しない考え方，イメージや態度を客観的に構造化することも可能となる．

方　法

対象者　東京都内在住の独身男性4名．平均年齢28歳．対象者の属性はTable2に示した通りである．現在，結婚意思がある者2名，結婚意思がない者2名を抽出した．

Table2　対象者の属性

対象者	年齢	最終学歴	現在の同居家族	きょうだいの中での位置	対象者の職業	年収（円）	1日平均実労働時間
A	25	大学院卒	一人暮らし	長男	大手企業技術系総合職	約400万	約10
B	32	大学院卒	一人暮らし	長男	大学教員	約400万	約9
C	27	大学卒	両親と弟	長男	小企業アナリスト	約700万	約9
D	28	大学卒	父親	長男	中企業技術職	約600万	約10

対象者	現在の結婚意思	現在の交際相手の有無	女性との交際経験	両親の婚姻形態	父親の職業	母親の職業
A	有	有	有	婚姻継続	大企業会社員	専業主婦
B	有	無	有	婚姻継続	教師	教師
C	無	有	有	婚姻継続	小企業社長	教師
D	無	無	有	離婚	教師	

調査時期　2002年4月中旬から5月下旬

調査形態　調査者2名（筆者および心理学専攻の大学院生1名）が，対象者ごとに3回，各回1時間から2時間程度，対象者の勤務している企業（または大学）の会議室，または調査者の所属する大学の面接室にて個別に面接を行い，さらに補足質問を電子メールや質問紙にて行った．面接の実施にあたっては，対象者の意志でいつでも面接が中止できることを伝え，面接内容を録音することの許可を得た上でカセットテープに録音した．

手続き　PAC分析（内藤，1997）にもとづき，以下の手続きで面接を行った．

1. 次のように教示し，対象者自身の過去における“結婚したい”という気持ちに関わることを，思い浮かんだ順にカードに記入することを依頼した．「あなた自身の体験についてお答え下さい．あなたが『結婚したい』と思ったときのことを思い浮かべて下さい．あなたがそのように思ったときに『自分に影響を与えたなあ』と思う人や出来事（親の影響，先生や先輩そして友人の影響，交際している（していた）異性の影響，結婚しなければならないというプレッシャーなど）に対する気持ち，気分を，思いついた順番に，お渡ししてある用紙一枚一枚に一文ずつ書いて下さい．その際，できる限り，単語ではなく文章で書いて下さい．全部で20枚を目安にしていただければ幸いです．時間に制限はありませんから『これ以上ない』と思われましたら私に声をかけて下さい」．このカードに記入された内容を，以下，連想項目と呼ぶ．
2. 連想項目が記述されたカードを重要と感じられる順に並べ替えてもらった．
3. 連想項目が記述されたカードをランダムに2枚ずつ提示し，類似度評定（7段階の評定尺度：A非常に近い，Bかなり近い，Cいくぶんか近い，Dどちらともいえない，Eいくぶんか遠い，Fかなり遠い，G非常に遠い）が記述してある用紙を見せ，これを全ての対について行ってもらった．教示は次の通りである．「この組み合わせを見て，言葉の意味ではなく，直感的イメージの上でどの程度類似しているかを判断し，その近さの程度を類似度評定AからGの該当する記号で答えて下さい」
4. 対象者自身の過去における“結婚したくない”という気持ちに関わることついても同様に，手続き1から3を行った．

分析方法　対象者の類似度評定結果をもとに，同じ連想項目の組み合わせは0点とし，AからGをそれぞれ1点から7点に対応させ，類似度距離行列を作成した．これをもとに対象者ごとに，階層的クラスター分析（クラスタリングの方法としてはウォード法を用いた）を行い，樹状図を作成した．なお，統計的分析には，Halwin ver.5.32を用いた．

対象者による解釈の方法　樹状図の余白部分に連想項目を記入した用紙を対象者に渡し，面接を再度行い，“結婚したい”という気持ちに関わることと“結婚したくない”という気持ちに関わることの両方に対し，以下の手続きを行った．

1. 対象者にまとまりを持つクラスターとして解釈できそうな群を作ってもらった.
2. クラスターごとに，上から各連想項目を読み上げ，連想項目全体に共通するイメージやそれぞれの連想項目がまとまった理由と，それらが意味する内容を解釈してもらった．同様の手続きを全てのクラスターに対して行った.
3. 各クラスター間の比較を行ってもらい，類似点や相違点などを述べてもらった.
4. 全体のイメージや解釈を述べてもらった.
5. 解釈が困難な連想項目を取り上げて，補足的に質問をした.
6. 各連想項目についてのイメージを“プラス”，“マイナス”，“どちらでもない”のいずれに該当するか答えてもらった．“結婚したい”という気持ちに関わることの場合，“プラス”のイメージは積極的に結婚したいことを示し，“マイナス”のイメージは消極的に結婚したいことを示すものとする．また，“結婚したくない”という気持ちに関わることの場合，“プラス”のイメージは積極的に結婚したくないことを示し，“マイナス”のイメージは消極的に結婚したくないことを示すものとする.

結　果

対象者の過去における体験を，“結婚したい”という気持ちに関わることと“結婚したくない”という気持ちに関わることに分け，それぞれについてPAC分析を行った結果を以下に記述する.

結果をまとめるにあたり，事例1（対象者A）および事例2（対象者B）は，現在，結婚意思があるため，上記PAC分析の結果のうち，“結婚したい”という気持ちに関わることのみを代表的な樹状図として示し（Figure1，Figure2），事例3（対象者C）および事例4（対象者D）については，現在，結婚意思がないため，“結婚したくない”という気持ちに関わることについてのみを代表的な樹状図として示した（Figure3，Figure4）．また，“結婚したい”という気持ちに関わることと“結婚したくない”という気持ちに関わること，それぞれについての全クラスター名をTable3に示した．以下，連想項目に関しては，対象者の記述をそのまま用い，『　』で示す．＜　＞は，クラスター名を示す.

Table3　対象者ごとの“結婚したい”“結婚したくない”におけるクラスター名

対象者	“結婚したい”におけるクラスター名	“結婚したくない”におけるクラスター名
A	A 周りの人の幸せな結婚に対する憧れ B 周りの人の結婚によって気づかされた自分の結婚に対するイメージ C 結婚により解消される不満や不都合 D 交際相手の仕事に対する配慮	a 交際相手と自分の生活における束縛の回避 b 結婚式や結婚相手への配慮に対する負担
B	E 周りの人の幸せな結婚に対する憧れ F 寂しさの解消 G 両親の期待 H 周りの人との比較による結婚への焦燥感	c ライフスタイルの維持 d 経済的な負担 e 両親からのプレッシャー f 女性との付き合いの難しさ
C	I 好きな人と過ごしたいという願望 J 結婚相手としての必要条件 K 周りからのプレッシャー	g 交際相手からのプレッシャー h 結婚したくない相手の条件 i ライフスタイルの重視 j 周りの人の不幸な結婚による否定的なイメージ
D	L 寂しさの解消 M漠然とした消極的結婚意思 N 結婚相手に対する理想と現実のギャップ	k 両親の不幸な結婚による否定的なイメージ l 一人の女性を愛することへの不安 m 結婚相手の両親との関係への不安 n 伝統的な結婚観と自分の思いとの葛藤 o 周囲やマスコミ報道による結婚に対する否定的なイメージ p 性別役割分業の支持 q 果たすべき妻の役割

事例1：対象者A

［結婚したい］　12の連想項目から構成され，クラスターAからクラスターDの4つのクラスターに分けられた（Figure1）.

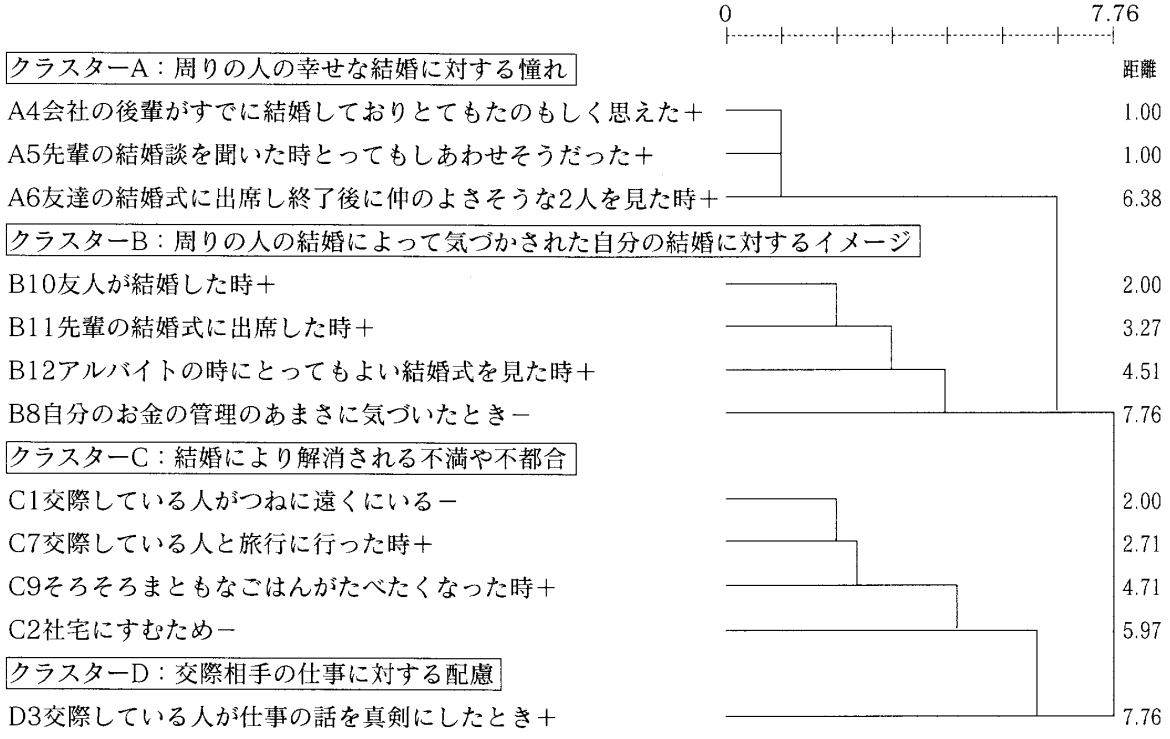

Figure1　対象者Aの"結婚したい"における樹状図

(注) アルファベットはクラスターを示し，アルファベット横の数字は対象者にとって重要と思われる連想項目の順位を示す．また，連想項目横の記号は，連想項目に対するイメージを示す．なお，文章は対象者の記述をそのまま用いている．

クラスターAは，3つの連想項目からなり，対象者Aは，周りで結婚した人が幸せそうで自信を持っている様子を見て，結婚生活に対して憧れを抱き，結婚に肯定的なイメージを抱いたことを示していた．そこで，このクラスターを＜周りの人の幸せな結婚に対する憧れ＞と命名した．クラスターBは，4つの連想項目からなり,周りの人の結婚式に参列して，「自分が結婚するときのための資金を貯めておかなければならない」と述べていたことなどから，具体的な結婚に対するイメージを抱いたことを示す4つの連想項目で構成された．そこで，このクラスターを＜周りの人の結婚によって気づかされた自分の結婚に対するイメージ＞と命名した．クラスターCは，4つの連想項目からなり，旅行などで一緒に過ごす楽しさを知り，遠距離恋愛のため，あまり会えないことを寂しいと感じており，結婚して社宅に一緒に住めばそれが解決されると思っていたことを示していた．また，現在，仕事が忙しく家事などはできないことを考え，経済的には全面的に対象者自身が負担し，家事に関しては7割くらい結婚相手に負担して欲しいと思っているため，一人暮らしのときと比較して家事の負担が減ると考えていた．そこで，クラスターCを＜結婚により解消される不満や不都合＞と命名した．クラスターDは，1つの連想項目からなる．対象者Aの交際相手は，現在遠方に住んでいるため，対象者Aが「結婚したら退社してもらえるか」と尋ね

たところ，「退社しても良い」と述べていた．そのため，対象者Aは,交際相手が結婚後の対象者Aとの新しい居住地近辺で同様の仕事を見つけることができるかどうかを心配していた．そこで，このクラスターを＜交際相手の仕事に対する配慮＞と命名した．

ここで，クラスター間の関係について検討する．クラスターAとクラスターBは，他者の結婚を間近に体験したことにより結婚願望を持ったことを示していたのに対し，クラスターCとクラスターDは，対象者自身の交際相手との関係から生じた結婚願望を示していた．また，クラスターBは，重要度が低いものが多く，対象者Aにとって周りの人の結婚式で得た印象はあまり重要ではないようであった．全体的には，対象者Aは，ほとんどの連想項目を“プラス”のイメージとしており，積極的に結婚したいと思っていた．

［結婚したくない］　9つの連想項目から構成され，クラスターaとクラスターbの2つのクラスターに分けられた．クラスターaは，『夜遅くまでTVを見たりパソコンをしたりできない』や『一人でマチを歩くのが好きだができなくなる』などの6つの連想項目からなり，結婚により自分だけの時間や仕事が制限される可能性があるので独身の方が気楽であるという独身のメリットを示すものであった．また，結婚したいと思っている交際相手の仕事を制約することが交際相手にとっての結婚のデメリットとなることを危惧していた．そこで，このクラスターを＜交際相手と自分の生活における束縛の回避＞と命名した．クラスターbは，『結婚する際の式やその他もろもろについて考えた時』や『相手のいやな面が見えた時』などの3つの連想項目からなる。「結婚式を挙げなければならない」，「相手のいやな面が見えても簡単に別れられない」，「結婚相手のことも思いやらなければならない」と述べており，結婚式の準備や結婚相手に対する気遣いの大変さを示しており，このクラスターを＜結婚式や結婚相手への配慮に対する負担＞と命名した．

事例2：対象者B

［結婚したい］　14の連想項目から構成され，4つのクラスターに分けられた（Figure2）.

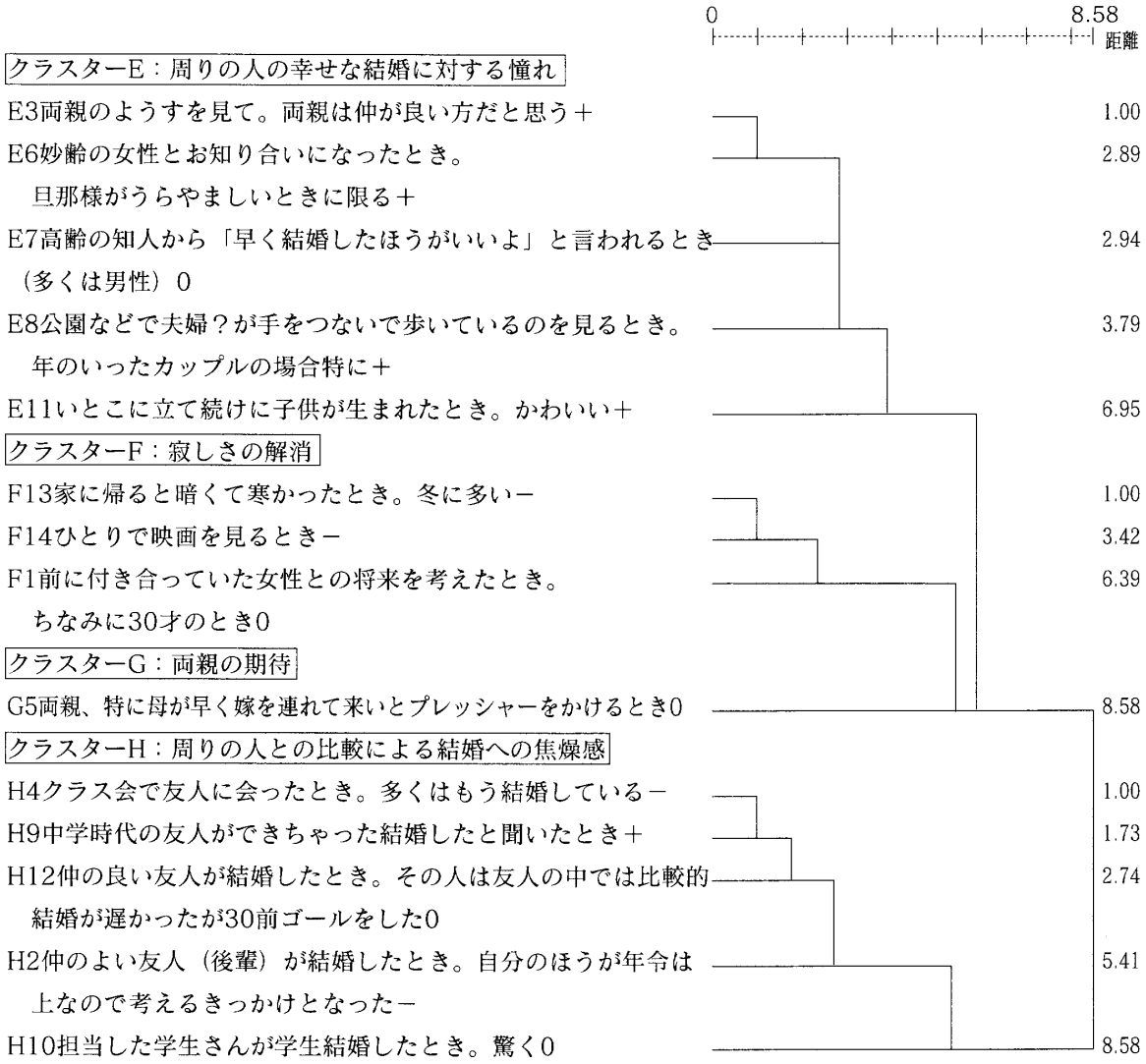

Figure2　対象者Bの"結婚したい"における樹状図

クラスターEは，5つの連想項目からなり，対象者Bの結婚に対する憧れ，願望，理想を示していた．仲の良い対象者自身の両親や親戚のかわいい子どもを見て，「近い将来結婚して，幸せになりたい」と述べていた．具体的には，「両親の結婚生活に対して嫌なことはなかったか」を尋ねたところ，「なかったと思います．何も思い出せません」と回答し，また結婚観の形成過程について「結婚観の基礎部分は両親の影響下で育んだといえます」と回答しており，両親の結婚生活に対する肯定的な発言が多かった．また，お見合い結婚に対する抵抗はなく，先輩でお見合い結婚している人の例を挙げ，「お見合いは出会いの方法の1つだと思います」と述べていた．そこで，このクラスターを＜周りの人の幸せな結婚に対する憧れ＞と命名した．クラスターFは，3つの連想項目からなり，独身の寂しさを示すものであった．現在，対象者Bは交際相手がおらず，一人暮らしである現状を寂しく思い，このような現状を結婚することにより変えたいと考えていた．そこ

で，クラスターFを＜寂しさの解消＞と命名した．クラスターGは，1つの連想項目からなる．対象者Bの両親は早く結婚して欲しいと願っているため，対象者Bは結婚することに対するプレッシャーを感じている反面，「両親を早く喜ばせてあげたい」，「両親に良いところを見せたい」と述べていた．また，結婚相手が子どもを欲しくない場合，子どもがいなくても良いと思っていたが，「両親のために子どもを作ってあげたい」と語った．そこで，このクラスターを＜両親の期待＞と命名した．クラスターHは，5つの連想項目からなり，対象者自身が，現在，独身で交際相手がいないため，教え子や友人などの身近な人が結婚したことに対する焦りを感じ，後輩や同世代の人に先を越されたという思いを抱いていた．対象者Bは，結婚はしたいと思っているが，愛することができる女性が一生現れないのではないかという危惧を抱いていた．また，結婚適齢期を意識していることも，結婚に対する焦りにつながっていた．そこで，クラスターHを＜周りの人との比較による結婚への焦燥感＞と命名した．

積極的に結婚したいと思っている“プラス”のイメージの連想項目は，結婚している周りの人の幸せそうな様子を中心に構成されており，一方，消極的に結婚したいと思っている“マイナス”のイメージの連想項目は，一人暮らしの寂しさと年齢的な焦りを中心に構成されていた．

［結婚したくない］　8つの連想項目から構成され，4つのクラスターに分けられた．クラスターcは，『ひとり暮らしが長くなんでも好き勝手にできるからそれを乱されたくないと思った』など，3つの連想項目からなる．対象者Bは，一人暮らしが長く自分の生活のペースができているため，好きなだけ仕事に打ち込んだりできなくなるなど，今の状況が変わることへの嫌悪感や反発心を抱き，「独身の方が気楽である」と語っていた．そのため，クラスターcを＜ライフスタイルの維持＞と命名した．クラスターdは，『子育てとか教育とかの心配をするとき（金銭面の心配が主)』の1つの連想項目からなり，子育てにかかる金銭面の負担に対する漠然とした不安を示していた．そこで，クラスターdを＜経済的な負担＞と命名した．しかし，対象者Bは，共働きをし，家事や育児を分担することが当然であると思っているため，「妻と一緒に稼ぐからお金がないことは結婚したくない大きな要因にはならない」と述べていた．クラスターeは，『両親に早く結婚しろと言われるときに反発して（気分による)』の1つの連想項目からなる．結婚はしたいが，理想の人が現れなければ結婚しないつもりでいるため，両親が結婚を急かすことを不快に思っていた．このクラスターを＜両親からのプレッシャー＞と命名した．クラスターfは，『女性の反応，対応に理性的でないものを感じ，理屈が通じないと感じるとき』などの3つの連想項目からなり，交際相手が理性的・論理的ではないときがあると感じ，交際相手とのトラブルにより自分の生活のペースを乱されることに対して不満や嫌悪感を抱いていた．そこで，クラスターfを＜女性との付き合いの難しさ＞と命名した．

クラスター間の関係をみると，クラスターcとクラスターfは，対人関係の難しさを示していた点で共通していた．

事例3：対象者C

［結婚したい］　7つの連想項目から構成され，3つのクラスターに分けられた．クラスターIは，『休みの時，一緒に過ごしたい』や『交際している女性と一緒にいたいと思った』などの4つの連想項目からなる．同棲または結婚して，好きな女性と暮らしたいという願望を示していた．そこで，このクラスターを＜好きな人と過ごしたいという願望＞と命名した．クラスターJは，『交際している女性が自分に良い影響を与えてくれる』と『仕事に対して熱心であり自分をもって

いる女性であった』の2つの連想項目から構成された．対象者Cは，このクラスターを最も重要だと評価し，「結婚相手が仕事を熱心にしており自分を持っていることが，結婚するにあたって妥協できない条件である」と述べていた．そこで，クラスターJを＜結婚相手としての必要条件＞と命名した．クラスターKは，『一生一人でいると女性と遊んでいると思われることが嫌だと感じた』の1つの連想項目からなる．このクラスターは，周囲の人から女性と遊びたいため結婚しないと思われている人の例を挙げて，結婚しないことに対する周りからの誤解への懸念を示していた．そこで，このクラスターを＜周りからのプレッシャー＞と命名した．

［結婚したくない］　16の連想項目から構成され，4つのクラスターに分けられた（Figure3）．

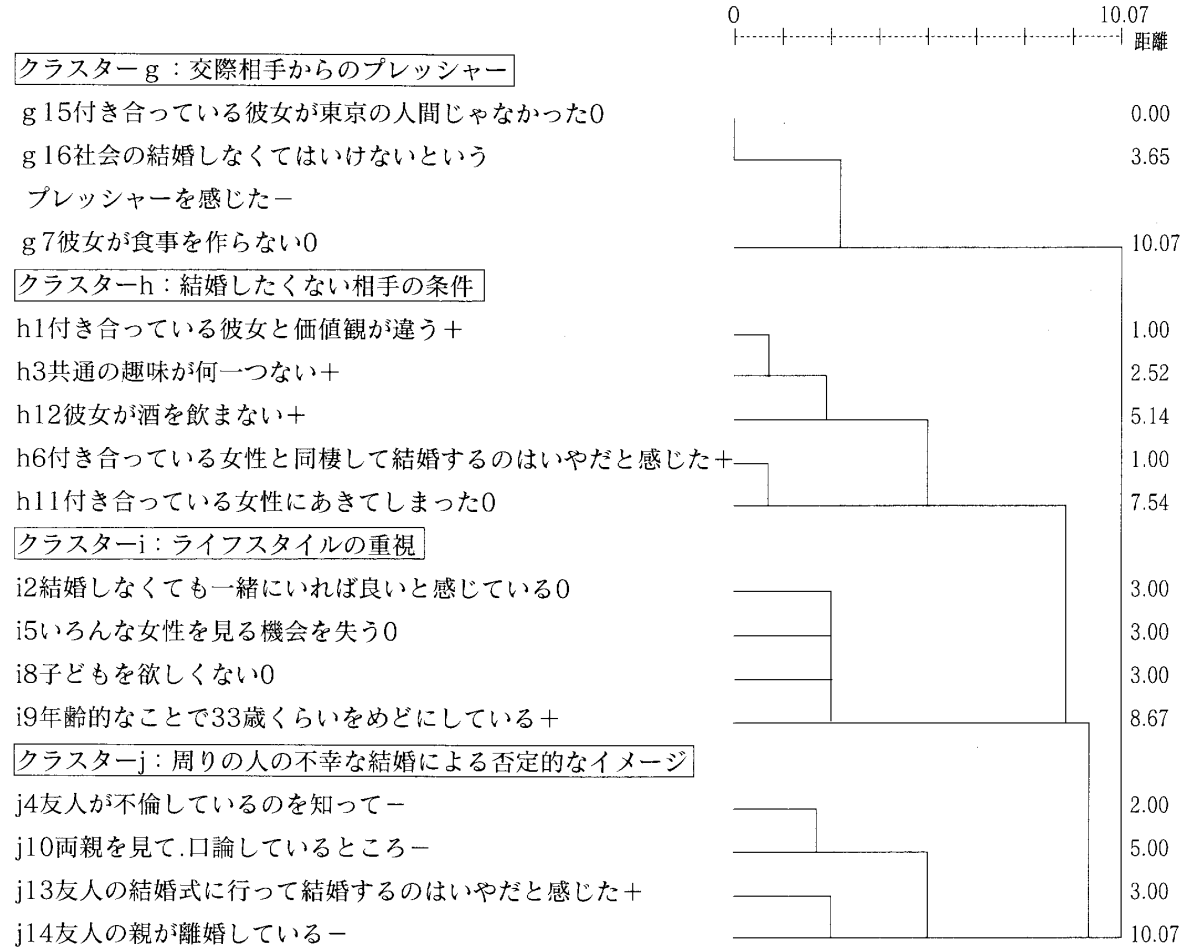

Figure3　対象者Cの"結婚したくない"における樹状図

クラスターgは，3つの連想項目からなる．対象者Cは結婚したら夫婦で同じ所に住み，一緒に食事を作りたいと思っているのに，過去に同棲していた交際相手がそのようにはしたくないと思っていたことなどから，その交際相手とは結婚したくないと思っていた．しかし，交際相手から「社会や周りから結婚に関しプレッシャーを受けており，このまま同棲を続けるなら結婚したいと思っている」と聞いたため，交際相手と結婚しなければならないのではないかと不安に思っていた．そこで，このクラスターを＜交際相手からのプレッシャー＞と命名した．クラスターhは，5つの連想項目からなり，対象者Cが過去の同棲経験にもとづいて，結婚したくないと感じたこと

を示すものであった．平等な家事分担，夫婦のコミュニケーションの充実や性的満足が得られることなど，共通の価値観や趣味を持つ結婚相手を選びたいと思っており，そうではない女性とは一緒にいてもあきてしまうので結婚したくないと思っていた．そこで，クラスターhを＜結婚したくない相手の条件＞と命名した．クラスターiは，4つの連想項目からなり，「結婚適齢期を意識しないわけではないが，現在の交際相手と結婚してうまくいく自信がなく，他に自分に合う女性がいるかもしれないと思っている」と述べていた．また，対象者Cは，安易な結婚が離婚を招くと思っており，安易な結婚はすべきではないと思っていたので，結婚前の同棲に対して肯定的であった．そして，必ずしも結婚する必要はないと思っていた．また，結婚しても子どもを持たず2人の生活を楽しむことも悪くないと思っていた．さらに，結婚しなくても良いが33歳くらいまでにパートナーと暮らしたいと思っていたおり，「結婚または同棲後も両親と自分達夫婦とはお互いに干渉せず，対等な関係を維持していきたい」とも述べていた．これらよりこのクラスターを＜ライフスタイルの重視＞と命名した．クラスターjは，4つの連想項目からなり，友人の両親の離婚や友人の不倫など，身の回りで起こった結婚にまつわる不幸な出来事を見て，結婚したくないと思ったことを示していた．対象者Cは，夫婦とは口論するものであると思っているが，両親が姑のことなどであまりにも激しく口論しているところを見た経験などから，結婚生活の大変さを知った．また，友人の結婚式に出席した際に，日本の結婚は欧米と比較して形式にとらわれていると感じた．そこで，このクラスターを＜周りの人の不幸な結婚による否定的なイメージ＞と命名した．

クラスター間の関係を見てみると，クラスターgとクラスターhは，対象者自身の経験にもとづいていた．消極的に結婚したくないと思っている連想項目（“マイナス”のイメージ）は，身近な人の結婚問題を中心に構成されていた．一方，積極的に結婚したくないと思っている連想項目（“プラス”のイメージ）は，結婚相手としての条件を中心に構成されていた．

事例4：対象者D

［結婚したい］　6つの連想項目から構成され，3つのクラスターに分けられた．クラスターLは，『外出先でカップルや夫婦の仲の良い姿を見たときに，ふと自分自身のさびしさを感じたとき』と『一人で街中を歩いている時』の2つの連想項目から構成された．このクラスターは，交際相手がいない寂しさを示すものであったが，このような感情は積極的に結婚願望に結びついているものではなかった．そこで，このクラスターを＜寂しさの解消＞と命名した．クラスターMは，『友人との酒の席での話などで，彼女との未来について質問された時に漠然と結婚について考えた』と『大学時代に交際していた女性と自分が別れるという気持ちがなかったので，このままいけば結婚するかなあと考えた事もあった』の2つの連想項目からなり，周りから交際相手との結婚を意識させられ，また，対象者自身が交際相手との付き合いの上での自然な流れから漠然と結婚を意識したことなどを示していた．そこで，このクラスターを＜漠然とした消極的結婚意思＞と命名した．クラスターNは，『テレビ等で家庭的な女性を見たりすると，この女性といれば幸せになれそうだなあと思ったりする』と『きれいな女性よりもいわゆる母性的なものを持っていると感じる女性を見た時の方が幸せな生活をイメージできる』の2つの連想項目から構成された．対象者Dは，家事や育児を完全に担ってくれる女性が理想であるのに，実際には，そうではない交際相手と付き合っていたため，自分自身の交際相手選択に疑問を感じており，理想の結婚相手を見つけたいと思っていた。そこで，このクラスターを＜結婚相手に対する理想と現実のギ

ャップ>と命名した.

クラスター間の関係について検討してみると，クラスターLとクラスターMは，積極的に結婚したいと思っているわけではない点が共通していた.

[結婚したくない]　17の連想項目から構成され，7つのクラスターに分けられた（Figure4）.

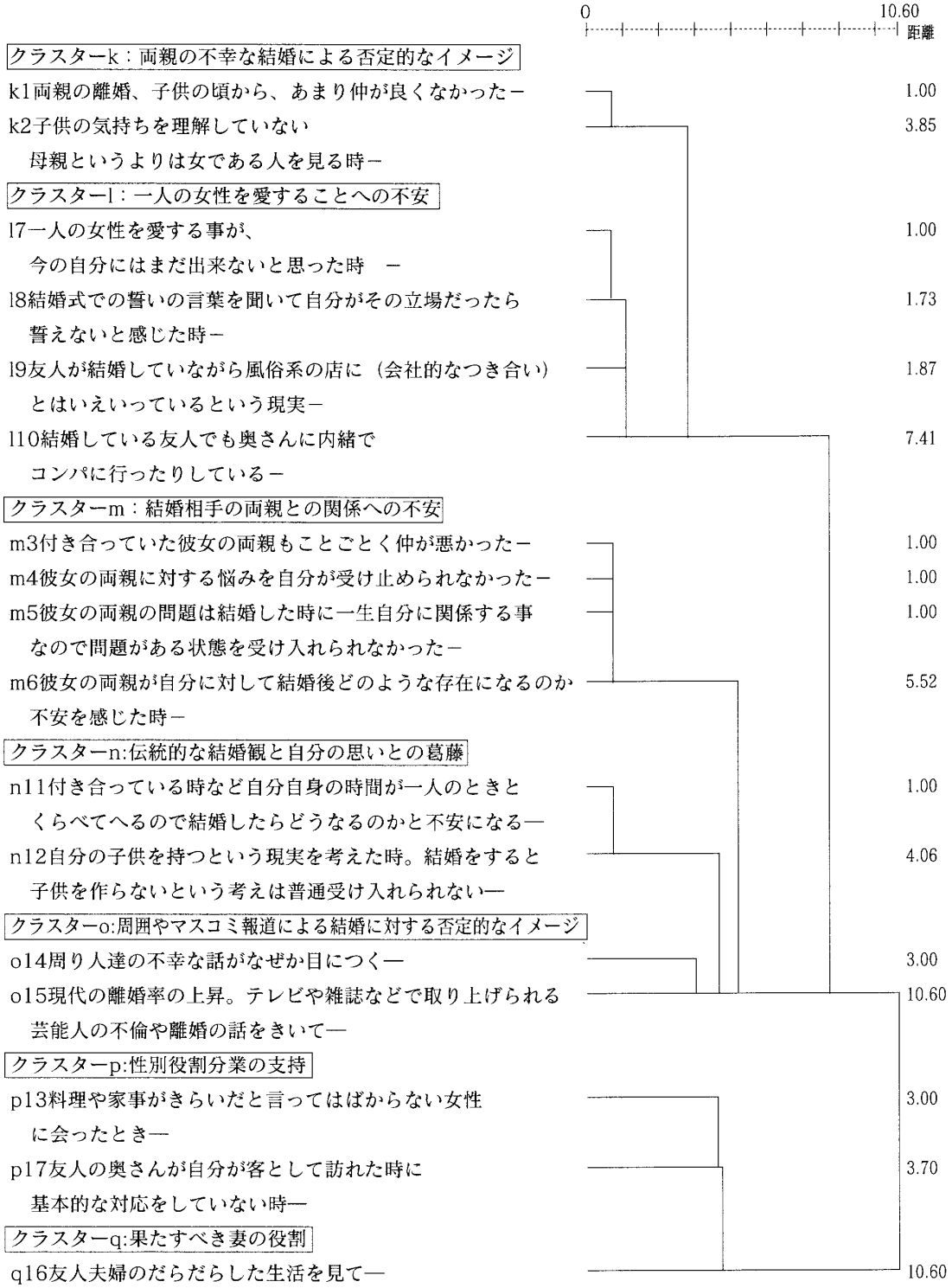

Figure4　対象者Dの"結婚したくない"における樹状図

クラスターkは，2つの連想項目からなり，対象者自身の両親の不和，離婚という実体験により，結婚に対して否定的なイメージを持ったことを示していた．父親だけの家庭に育ったことについて，「子どもの頃は不幸だと感じていたが，現在は不幸だとは感じていない」と述べていた．そこで，このクラスターを＜両親の不幸な結婚による否定的なイメージ＞と命名した．クラスターlは，4つの連想項目から構成された．対象者D は，結婚後，他の女性を好きになることはあっても不倫はせずに，一人の女性を愛することが結婚であるという考えを強く持っており，その責任を負うことへの戸惑いや不安を示していた．しかし，交際相手との関係の中で，結婚前にお互いを完全に理解することは不可能だと感じ，一人の女性を愛し続けることに自信がなかった．そこで，クラスターlを＜一人の女性を愛することへの不安＞と命名した．クラスターmは，4つの連想項目からなり，交際相手の両親の不仲に対し不安を抱いていたことを示していた．交際相手の両親が不仲であり，そのことについて悩んでいる交際相手を受け止められるか不安であり，また，結婚後の自分と交際相手の両親との関係についても不安を抱いていた．そこで，このクラスターを＜結婚相手の両親との関係への不安＞と命名した．クラスターnは，2つの連想項目からなり，結婚したら当然子どもを持つべきであると思っているが，子育てなど，結婚生活を営むにあたって自分の時間が取られることが多くなることに抵抗感を抱いていており，伝統的な結婚観に自分のライフスタイルを合わせられるか不安に感じていた．そこで，このクラスターを＜伝統的な結婚観と自分の思いとの葛藤＞と命名した．クラスターoは，2つの連想項目からなり，現代の離婚率の上昇など，日本社会の結婚の現状をマスコミ報道や周り人の話を聞き，結婚に対する否定的なイメージを持っていることを示すものであった．このクラスターを＜周囲やマスコミ報道による結婚に対する否定的なイメージ＞と命名した．クラスターpは，2つの連想項目からなり，対象者Dは女性に性別役割分業を担ってもらうことを重視していたため，家事や育児などの性別役割分業を担わない女性に対して否定的であることを示していた．そこで，このクラスターを＜性別役割分業の支持＞と命名した．クラスターqは，1つの連想項目からなり，友人夫婦の部屋がまったく片付いていない状態を見て，妻としての役割を果たしていないことに対して嫌悪感を示していた．そこで，このクラスターを＜果たすべき妻の役割＞と命名した．

クラスター間の関係を検討してみると，クラスターk，クラスターm，そしてクラスターoは親や周りから受けた結婚に対する否定的なイメージを示していた．クラスター l，クラスターp，そしてクラスターqは，対象者Dの伝統的な結婚観とそれが実現できないのではないかという危惧を示していた．連想項目に対するイメージとしては，すべて消極的に結婚したくないと思っているものであった．連想項目の重要度から見ると，クラスターkおよびクラスターmに対象者Dが重要であるとするものが多く含まれており，対象者自身および交際相手の両親に関することが対象者Dに結婚を躊躇させていることがわかる．

考　察

高学歴の独身男性の結婚意思と，それに影響を与える結婚観について，上述した4名の事例のPAC分析の結果をもとに，以下，考察を加えていく．

女性の経済的自立などにより，女性の側が結婚する必要がなくなり，その結果，男性が結婚難に陥っているとの調査・研究が多いが，本研究での4名の事例を見ると，そのような男性ばかりではないことがわかった．

まず，対象者Cについて考察する．対象者Cの母親はフルタイムの仕事をしており，そのため，父親も母親と同様，家事や育児を行っていたという家庭環境から，それを当然であると思い，結婚生活において性別役割分業意識を持っていなかった．そのため，対象者Cは，結婚生活において，女性に家事などの性別役割を担ってもらうことを期待しておらず，価値観や趣味が合うことや，仕事を持ち自分を持っていることを重視していた．渡辺(1988)による大学生男子に対する調査においても，結婚や出産の後も有職の母親を持つ者の方が無職または中途就職の母親を持つ者より，“男は仕事，女は家庭”という考え方に反対する割合が高いことが指摘されている．また，対象者Cは同棲に対して抵抗がなく，逆に同棲することにより交際相手が理想の女性であるか否かが判断できるため，同棲をしてから結婚を決めるべきであると考えていた．実際，対象者Cには過去に同棲経験があり，そのときは交際相手が理想の女性ではないと感じ交際をやめた．

このように，対象者Cは，女性に性別役割分業を期待しておらず，女性にも仕事を持っていて欲しいと考えている点が，近年の社会進出している女性の結婚観に合致しており，結婚難にある男性ではないといえよう．つまり，対象者Cに現在，結婚意思がないのは“理想の相手志向”が強く，それに見合った女性がいないためと思われる．性別役割分業を期待する男性が近年減少している（国立社会保障・人口問題研究所，2003a）ことからも，対象者Cのように，性別役割を担ってもらうことではなく，価値観や趣味が一致することを重視する者が今後も増えると思われる．しかし，価値観や趣味が一致する相手を見つけるには時間がかかる可能性が高いため，このような“理想の相手志向”が晩婚化の一要因であると考えられる．

次に，対象者Bは対象者Cと同様，母親はフルタイムの仕事をしており，父親も家事や育児を担っており，それを当然であると思っていたことから，性別役割分業意識を持っていない．対象者Bは，“理想の相手志向”であるが“結婚適齢期志向”が強い点，親の早く結婚して欲しいという期待に応えたいという気持ちが強い点，などが対象者Cと異なっていた．結婚願望が強く，結婚していないことに対して焦燥感もあるが，現在のライフスタイルを維持したいと願っており，結婚相手により自分の生活のペースを乱されることを危惧しており，結婚するとライフスタイルの維持が難しくなることを懸念していた．また，理想の女性が現れるまで結婚するつもりはないため，現在，結婚意思はあるが，結婚にいたっていないと考えられる．

対象者Cと同様，対象者Bも，社会進出している女性の結婚観に合致しており，結婚難にある男性ではないと思われる．しかし，対象者Bが，早期に結婚したいという意思を持っているにもかかわらず結婚にいたっていないのは，自分のライフスタイルを犠牲にしてまで結婚する必要がないと考えていたためではないかと思われる．

このような結果は，結婚により自由を失うことを危惧しているという結果（博報堂生活総合研究所，1993; 伊東，1997a）を支持しているといえよう．つまり，自由を失うことにより自分のライフスタイルが維持できなくなると思っているのではないかと思われる．また，対象者Bは，性別役割分業意識が強くないにもかかわらず，結婚意思が強いが，これは結婚意思がある者の方がない者より性別役割分業意識を持っているという結果（国立社会保障・人口問題研究所，2003a）を支持しておらず，他の要因により結婚意思が強まる可能性があることを示唆していた．

対象者Aは，性別役割分業を基本的には支持しており，長時間労働のため家事などはできないことなどから、家事や育児については7割を女性に期待し，経済的には全面的に男性（自分）が担うべきであると思っていた．また，女性の就労については，家事に影響を与えない範囲であれば，働いても構わないと考えていた．つまり，対象者Aは家事や育児の大部分を女性が行い，一

部手伝い程度に協力するといった態度であった．

対象者Aは結婚意思が強く，現在交際している女性と結婚するつもりであり，またその女性も対象者Aとの結婚に同意していた．その女性は遠方に住んでいるため，現在のフルタイムの仕事をやめ対象者Aと同居し，家事全般を引き受けるつもりであるなど，対象者Aの結婚観と合致していた．これは，結婚意思がある者の方が性別役割分業に賛成であるという結果（国立社会保障・人口問題研究所，2003a）を支持していると思われる．

対象者Aは結婚によりライフスタイルを維持できなくなることを懸念していたが，対象者Aの結婚観を交際相手が支持してくれていたため，その懸念が払拭され，結婚することを決断したのではないかと考えられる．

対象者Dは，性別役割分業を完全に支持しており，それを受け入れてくれる女性との結婚を望んでいたが，結婚意思は弱かった．対象者Dは，「交際した女性があまり家事をしたくないとわかったので，結婚したくなくなった」と述べていた．また，対象者Dの結婚観は，結婚したら子どもは作らなければならない，結婚したら一人の女性を愛し続け離婚をしてはいけないなど，いわゆる伝統的なものであった．国立社会保障・人口問題研究所（2003a）の調査結果によると，このような考え方は結婚意思がある者の方がない者より支持していることが報告されているが，その傾向とは逆である．その理由としては，対象者Dが，家事や育児は全て女性が行うべきである，子どもは必ず作らなければならない，一人の女性を愛し続け離婚をしないという考えを強く持っていると同時に，そのような結婚観を実現することは非常に難しいとも思っていたことが挙げられる．対象者Dのような伝統的な結婚観は現代の女性にはあまり受け入れられないことは対象者D自身も感じており，自分の結婚観が実現し難いという思いがあきらめになり，結婚意思が失われてしまったのではないだろうか．

また，対象者Dは，「結婚についての考えは幼い頃の両親の離婚などにより形成されたと思う」と述べていた．両親の仲が良かった者は結婚に対して肯定的なイメージを持ち結婚意思を強めるが，仲が悪かった者は否定的なイメージを持ち結婚意思を弱めるというJennings, Salts & Smith(1991)，伊東(1997a)の結果を示唆している．さらに，対象者Dは，周りの人の結婚生活やマスメディアの影響も受けていた．マスメディアによる情報は，先有する態度に合致する場合，それを補強するような役割を果たすが，合致しない場合，先有する態度を変えることは稀であるとされる（Lazarsfeld, Berelson & Gaudet, 1944; Klapper, 1957）．対象者Dは，自分自身の経験から結婚に対して否定的になり，それに合致するようなマスメディアなどの情報を取り入れていたと考えられる．

次に，全体的な考察を加える．対象者は4人とも長男であったが，今回の調査では，結婚に，はっきりと“イエ”を意識している者はおらず，すでに結婚における“イエ”制度的な結婚観は都市においてはなくなりつつあるといえよう．

過去の調査・研究においては，近年の晩婚化の要因として女性が結婚する必要がないと考えることにより男性が結婚難に陥っているという結果が多いが，本研究での高学歴の独身男性4名についてはあてはまらず，自らの意思によって結婚するか否かを選択していた．また，本研究の対象者はすべて長時間労働であるが，高学歴の長時間労働の男性に交際相手はいる者が多い（日本青年館・結婚相談所，2000）ことからも，このような層の男性はいわゆる交際相手がおらずに結婚難に陥ってはおらず，高学歴の独身男性は，自分の理想とするライフスタイルと結婚によるライフスタイルの変化，結婚相手との価値観の一致など，さまざまな要因を考え，結婚に対する葛

藤を抱えていると推察される.

たとえば，日本青年館・結婚相談所の調査(2000)によると，中学校卒，高等学校卒の男性では，性別役割分業に対して，賛成・反対の意見が比較的はっきり分かれているのに対し，高学歴の男性は賛成・反対の態度を決めかねている者の割合が高いことが報告されている．この性別役割分業について考えると，たとえば，対象者Bや対象者Cのように性別役割分業意識がない男性であっても，現在も長時間労働であることから推察して、日本で仕事での自己実現を目指そうとすると，年功序列賃金制度などにより，若いうちは成果を出しても評価されないため，残業や人付き合いが多くなりがちで，自分の自己実現のためには女性に家事や育児を頼りたいという考えも浮かぶかもしれない．さらに高学歴との関係について考えると，多くの残業をしてまで仕事での自己実現を目指そうとするのは比較的高学歴の層に多いであろうし，また，高学歴の女性が社会進出をしていくのを間近に見聞きし，家事や育児を働く女性と共に行うべきとの意見になる機会が多いのも高学歴層ではないであろうか．高学歴層の男性の方が性別役割分業に対する賛成反対の態度を決めかねている理由はこのあたりにあるのではないかと考えられる.

ライフスタイルを決めるにしても，上記にも述べたように従来の日本型の雇用慣行の象徴である長時間労働により家庭生活と仕事での自己実現を両立させ難く，ライフスタイルを決めかね，結婚意思が低下する，あるいはライフスタイルを決定しても，コンビニエンスストア，ファミリーレストランの急速な普及などにより妻がいなくても食事に困らない，洗濯もクリーニングが普及するなど，家事の外注が可能になり，結婚意思が低下し，理想の女性が現れなければ，結婚する気持ちにならないことなども考えられる.

本研究では対象者が4人と少なかったが，女性の結婚意思の低下に影響を受け男性が結婚難になっているのではなく，男性も自分自身の明確な結婚意思を持っていることがわかった．また，その結婚観などから，高学歴層に特徴的なライフスタイルへのこだわりのようなものが背景として存在していることが推察された.

今後は，対象者数を増やし，高学歴の独身男性の結婚意思に影響を与える結婚観とそれを形成するさまざまな要因も含め，高学歴の独身男性の晩婚化について研究をしていく予定である.

引用文献

阿藤誠　1989　未婚・晩婚時代の到来　家族研究年報，**15**，24-35.

阿藤誠　1994　未婚化・晩婚化の進展：その動向と背景　家族社会学研究，**6**，5-17.

藤竹暁　1992　若者の結婚離れ　岡堂哲雄（編）　現在のエスプリ別冊　マリッジ・カウンセリング：心豊かな結婚生活のために，婚前・婚後に読む情報　至文堂　pp.43-54.

博報堂生活総合研究所　1993　調査年報1993　高シングル社会：未婚者・既婚者の＜シングル性＞調査　博報堂生活総合研究所

伊東秀章　1997a　未婚化に影響する心理学的諸要因：計画行動理論を用いて 社会心理学研究，**12**(3)，163-171.

伊東秀章 1997b　未婚化をもたらす諸要因　家族社会学研究，**9**，91-98.

伊藤裕子　1995　結婚年齢　発達，**61**，55-57.

Jennings,A.M., Salts,C.J., & Smith.Jr,T.A. 1991 Attitudes toward marriage：Effects of parental conflict, family structure, and gender. *Journal of Divorce & Remarriage*, **17**, 67-79.

Klapper,J.T.　1957　What we know about the effects of mass communication：The brink of hope. *Public Opinion Quarterly*, 21
（吉岡至（訳）　2002　マス･コミュニケーションの効果についての知識：希望の淵　谷藤悦史・大石祐（編）　リーディングス政治コミュニケーション　一藝社　pp.41-63.）
国立社会保障・人口問題研究所　2003a　第12回出生動向基本調査　結婚と出産に関する全国調査：独身調査の結果概要　国立社会保障・人口問題研究所
国立社会保障・人口問題研究所　2003b　人口統計資料集2003　国立社会保障・人口問題研究所
Lazarsfeld,P., Berelson,B., & Gaudet,H. 1944 *The people's choice：How the voter makes up his mind in a presidential campaign*. Columbia University Press.
（有吉広介（監訳）　1987　ピープルズ・チョイス：アメリカ人と大統領選挙　芦書房）
内藤哲雄　1997　PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待　ナカニシヤ出版
日本青年館・結婚相談所　2000　30代男性の結婚意識と生活に関する調査報告と提言：首都圏における30代男性の「未婚事情」　日本青年館・結婚相談所
大橋照枝　1993　未婚化の社会学　日本放送出版協会
渡辺秀樹　1988　学生の性役割観と結婚観：意識調査の分析　電気通信大学紀要, 1(1), 215-241.
山田昌弘　1999　パラサイト・シングルの時代　筑摩書房
山田昌弘　2000　結婚の現在的意味　善積京子（編）　シリーズ＜家族はいま…＞①　結婚とパートナー関係：問い直される夫婦　ミネルヴァ書房　pp.56-80.
湯沢雍彦・川崎末美　1989　未婚男性勤労者の結婚難の諸要因：A社千葉工場の場合　家族研究年報, 15, 14-23.